

長田夏樹氏の北京語ローマ字表記「gj-」などについて

中村雅之

1. 長田 1953 の誤記

長田 1953 は北京語文語音の起源について論じた記念碑的な論文であるが、他の初期の長田論文と同様、誤記に満ちている。全体の正誤表は別の機会に用意したいと思うが、ここでは単純な誤記とは言い難い「gj-/kj-/xj-」という表記について述べたい。長田 1953 における北京音は、それに先立つ長田 1951 で公表された独自のローマ字表記で示されるが、そこではピンインの「j-/q-/x-」に相当する表記は「zj-/cj-/sj-」であり、「gj-/kj-/xj-」は存在しない。しかし長田 1953 には「zj-/cj-/sj-」の外にも所々に「gj-/kj-/xj-」という表記が見えるのである。これは単純な誤記とは考えられない。なぜ、このように“存在しないはず”の表記があらわれたのであろうか。

2. 舌面音の表記

長田式ローマ字表記も現行のピンインも、ともに 1930 年前後に作られたラテン化新文字を土台にしている。ラテン化新文字では、いわゆる尖音と団音の区別があり、尖音 [tsi-/ts' i-/si-] を「zi-/ci-/si-」で記し、団音 [tei-/te' i-/ei-] を「gi-/ki-/xi-」(初期には gi-/ki-/hi-) で記した。団音は当初から舌根音 [ki-/k' i-/xi] ではなく、舌面音 [tei-/te' i-/ei-] を意図していた。このように舌面音に「gi-/ki-/hi-(xi-)」を用いるというアイデアはその後のピンインの草案でも受け継がれ、北京音の舌面音(尖団の区別なし)を 1956 年 11 月の草案(修正第一式)では「gi-/ki-/hi-」としていた。一年後の 1957 年 11 月になって「ji-/qi-/xi-」という表記が採用され、翌年正式に公布されることになる。

太田辰夫著『中国歴代口語文』は 1957 年 5 月に江南書院から初版が出たが、その語注部分の表音に用いられたローマ字綴りは当時の草案(修正第一式)の方式によったと思われる。つまり、「脚 giǎu」「錢 kián」「心 hīn」という綴りである。ちなみに、この本は後に朋友書店から「改訂版」が出て何度も版を重ねたが、ローマ字綴りは変わっていないようである。

この少し前には倉石武四郎著『ラテン化新文字による中国語初級教本』(岩波書店、1953)も出版されており、1950 年代の日本では、舌面音を「gi-/ki-/hi-(xi-)」で表すという方式は、違和感なく受け入れられていたと言ってよいだろう。

3. 再び、長田 1953 の誤記

長田 1951 で提出された北京語のローマ字表記案では、舌面音は「zj-/cj-/sj-」となっているが、初期案はむしろ「gj-/kj-/xj-」だったのではないか。あるいは、「zj-/cj-/sj-」と「gj-/kj-/xj-」のいずれを採用するか迷った時期があつて、長田 1953 には双方の綴りが顔を出してしまったのかも知れない。

具体例を少し挙げてみよう。(声調記号は省略)

zj-:「脚」「角」「覺」いずれも文語音「zjye」口語音「zjiau」(ピンインの「jue」「jiao」に相当)

gj-:「給 gjj」「棘 gjj」「更 gjing」(それぞれピンインの「ji」「ji」「jing」に相当)

以上はいずれも団音の例であるから、尖音と団音を書き分けているのではない。単に表記の不徹底ということになる。

ただし、「隔」の口語音を「gjie」とし、その注に「元来 g^{ai}. @, 街, 界 g^{ai} が g^{jie} となった為, これも g^{jie} となる。」(3 頁右段の注⑨、なお@は判読しがたい)と記しているのは、尖団の区別を意識しているようにも見える。長田 1951 では、尖音と団音について「必要に応じて区別する。その場合聲母に就いては拉丁化と同じとなる」(49 頁右段)とする。長田 1953 が「隔」について「元来 g^{ai}」とするのはその例であろう。このような[kⁱ-]>[t^{ei}-]の変化を念頭に置けば、それを「gⁱ->「g^{ji}-」のように表記するのは分かりやすいとも言えるが、尖音の場合には「zⁱ->「g^{ji}-」と表記することになり、これは感覚的に分かりやすいとは言えない。

最終的には、舌面音を「z^{ji}-/c^{ji}-/s^{ji}-」で表すというのが長田 1951 の結論になった。長田 1953 において「g^{ji}-/k^{ji}-/x^{ji}-」が時折顔を出すのは、表記法が定まっていなかった頃の名残と言えよう。つまり、長田 1953 は、その元となる原稿では当初「g^{ji}-/k^{ji}-/x^{ji}-」を用いていたことになる。それを後に「z^{ji}-/c^{ji}-/s^{ji}-」に書き改めた。とすれば、北京語文語音についての研究は実際には 1951 年以前に始まっていたことになる。契丹語や蘇州語の研究などで忙殺されたため、二年余り経ってから原稿に手を入れて 1953 年に発表したということではあるまいか。その際、舌面音の表記の書き直しが徹底されなかったのである。長田 1953 が北京語文語音の研究史において非常に重要な位置を占めるべき論文であるだけに、このような表記の不徹底が読者の理解を妨げているのは残念なことである。

参考論文:

長田夏樹 1951, 「北京語のローマ字表記法に就いて」, 『神戸外大論叢』2-1. (『長田夏樹追悼集』pp.6-19 所収, 好文出版, 2011)

長田夏樹 1953, 「北京文語音の起源に就いて」『中国語学研究会会報』11. (『長田夏樹先生追悼集』pp.45-49 所収, 好文出版, 2011)